

特集 登別の魅力再発見！ 地域の支え合いのあり方を考える



実際に市民が動いたという事実

今回の非常事態において、住民一人ひとりの自主的な判断により困難を抱える住民への支援ができたこと、協力頂いた皆様方の心温まる支援活動に感動しました。こうして様々な実践者の方々の存在が地域の安心を担保したことは間違いない事実であります。ほとんどの住民が自ら被災者である中、より問題を抱える可能性のある人々の安否確認や支援活動に走り回りました。この活動から、仕事の有無や性差に関わらず誰もが人助けをしたいという気持ちを持っているということが明らかにになりました。

今回の災害が 最大のチャンス！

大切なのは 地域のつながり方



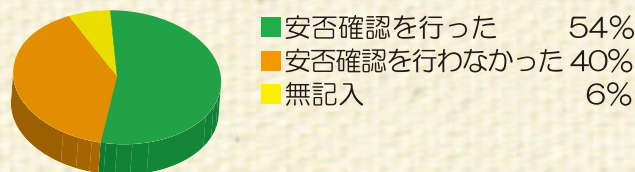
6月29日、しんた21において、約200名の市民の皆様にご参加頂き、『きずなシンポジウム』を開催しました。今回のシンポジウムでは、昨年発生した暴風雪による大規模停電に関するアンケートの結果を踏まえつつ、今後の地域支え合い活動のあり方を考えることを目的に、きずな大使である鳥居一頼氏による講演と3名のきずな活動実践者の皆様から発表を頂きました。

講演

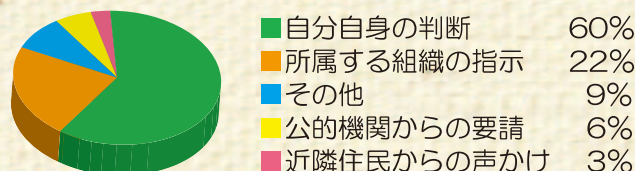
「大停電アンケート調査分析から見た
地域支え合い体制のポイント」
きずな大使 鳥居 一頼 氏



グラフ1. 要援護者世帯への安否確認を行ったか？



グラフ2. 安否確認を行うことになったきっかけは？



「地域支え合い活動の視点」
～新たな仕組みづくりから考える～

地域包括支援センター等、
専門機関と連携した見守り活動が大切

↓富岸小学校区住民座談会（新寿の家）



富岸小学校区
きずな推進委員会
リーダー
瀧川 正義 氏



POINT

- ・各町内会の活動内容を情報共有
- ・民生委員との連携
- ・それぞれの町内会の状況に合わせて推進

日頃からつながりを持つことで
災害時等緊急時にも迅速な対応が可能



「子育てサロン」です
(個別西園地集会所)



鷺別小学校区
きずな推進委員会
サブリーダー
中原 義勝 氏

POINT

- ・サロン活動を通じ、地域住民の孤立防止を意識したきずなづくりを行う
- ・子育てサロンと～ます開設をきっかけに異世代交流を通し、地域ぐるみで次の世代を育んでいく

地域の見守り支え合い体制づくりの
調査研究に取り組んでいます

↓作業委員会先進地視察研修（旭川市他）



きずな推進委員会
作業委員会
副委員長
鳴海 文昭 氏



POINT

- ・「個別支援」の視点を持った活動展開
- ・既存のものを活かした活動展開
- ・専門職等との「ネットワーク」を活かす

日々の福祉活動を行う地域ほど
災害時に強い

安否確認をした人の中で72%の人が日常活動をしていることは、日常的な活動の重要性が理解できます。一方、安否確認をしていない人の54%の人が日常活動をしているという事も注目すべき点であります。日常活動している人の68%しか安否確認を行っていないということになりますが、日常活動をしていなくても43%の人が安否確認に協力しているということは、災害時における人々の相互支援関係を期待することが可能であることを示唆しています。このことから、地域には福祉活動の担い手になって下さる方がたくさんいるはずということが言えます。

平時から災害時まで対応できる
地域づくりを！

今回の災害から、日常的な地域や人との関わり方をステップアップしていかなければならないことを、多くの市

表1. 日常的な活動と安否確認の関係性

日常的な 取り組み	安否確認			合計 (%)
	あり	なし	無記入	
あり	720	54.3	53.3	63.8
なし	18.5	30.3	13.3	22.9
無記入	9.4	15.4	33.3	13.3
合計 (%)	100.0	100.0	100.0	100.0

日常的な 取り組み	安否確認			合計 (%)
	あり	なし	無記入	
あり	60.8	33.9	5.3	100.0
なし	43.5	52.8	3.7	100.0
無記入	38.1	46.0	15.9	100.0
合計 (%)	53.8	39.8	6.4	100.0

民は学んだのではないのでしょうか。「きずな」は「ある」ものではなく「紡ぐ」もので、その紡ぎ手は市民一人ひとりであります。

災害が起こっても「この地域は大丈夫！」という確証は、日々の暮らしの「きずなづくり」にしかないと心を強く留めて、「災害の教訓」としてさらなる「きずなづくり」に邁進しなければなりません。それが次世代に手渡す災害に備える「心構えと行動」ではないでしょうか。

のぼりべつ しゃきょう

検索

